

イランへの救援資金にします。

申し込み⇒ TEL-078-391-7508・FAX-078-391-8549 (全教神戸「絆」編集係)

購入にご協力をよろしくお願い致します。

神戸のなおちゃん

池見宏子・作
池見民子・イラスト
阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議・取扱
B5 版 21 ページ 400 円(〒160 円)

震災で学校が全壊、友達とも離ればなれになってしまったなおちゃんが、多くの愛に支えられ、希望を持ってけなげに生き抜き、2 年目の春を迎えます。震災当時避難所となった小学校に勤務し、翌春から復興担当教員として児童を見守った池見宏子さんの作品で、ボランティアによる紙芝居が上演されるなど、大きな反響を呼びました。学校などでの学習活動に御利用ください。(1996 年刊)

神戸のなおちゃん 2

池見宏子・作
池見民子・イラスト
被災地 NGO 協働センター・取扱
B5 版 30 ページ 500 円(〒160 円)

震災当時 2 年生だったなおちゃんも、いよいよ小学校卒業の年を迎えました。月日経っても進まない身近な友達やお年寄りの復興の様子・辛い生活の中であきらめないでどうして頑張ろうとしているのか? 好評を博した「神戸のなおちゃん」の続編です。学校などでの学習活動に御利用ください。(1999 年刊)

被災地協働センター書籍コーナーより

横浜の NGO の人たちによる
「かみしばい」もあります。教材に使ってください。(¥1500 カンパ含む)

いつも届けられるカンパ【神奈川県馬場さんから】 ありがとうございます。

震災から学んだ教訓を受け継ぎ奮闘しております。このような支援は大きな励みになります。【阪神淡路被災者ネットワーク】へ安田秋成さんを通してお渡しします。いつも有難うございます。
兵庫教組 岩本書記長

また新しい年がやってまいりました。12 月のイランの大地震の報道を見ていると、阪神淡路の大震災を思い出します。何と国民に冷たい政府でしょうか。腹が立つことばかりですが、明るい国にしていくよう共にがんばりましょう。少ない金額ですが、送らせていただきます。
皆様、お元気で活躍ください。

2004 年正月 神奈川県伊勢原市 馬場

被災地だより これ以上人災による犠牲者を出さないために
強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ



第23号 2004・1・17

9年目を迎えて

全教神戸市教職員組合「絆編集係」神戸市中央区下山手通4・13・9中尾ビル3F・
TEL-078-391-7508・FAX-078-391-8549・〒振込口座番号 01170-7-29732

1・震災の教訓は生かされているか?

(学校現場での検証)

・はじめに

1995 年 1 月 17 日に発生した兵庫県南部地震から、9 年が経ちました。

マグニチュード 7.2 という、ごくありふれた「大地震」でした。それが「大震災」になり、6400 名以上のかけがえのない命を奪い、今まで築いてきた町が一瞬にして壊滅状態になってしまいました。

地震直後、このような大きな災害になってしまったのは、まさに「人災ではないか?」として、これまでの町づくりが問われ、様々な分野の専門家だけでなく市民グループ、個人も加わった検証活動が行われました。

その結果、震災前の神戸の町づくりが大地震を想定した「安心と安全」の町づくりでなかったことが明らかになったのです。

(「大震災 100 の検証」参照 *1)

そして、その後の復興活動では、そのような教訓を生かした町づくりを行うよう様々な分野で提言が出されました。学校が長期の避難所であったことと、学校の本来の役割は、両立しませんでした。全教神戸も、学校現場が長期の避難所になった反省から、学校を「普段から子ども達にとって安全と安心」の場所であることこそが大切だとの考えから、提言を発表しました。

(学校防災「神戸からの提言」*2)

震災から 9 年、来年は 10 周年を迎えようとする今年、もう震災は終わった、来年を最後に復興終了宣言をしようとする動きが見られます。本当に学校現場は、「安心と安全」が保障されてきたのかを振り返り、今後の取り組みに生かすことができれば、との思いを込めて、次にまとめました。

(次ページへ)

- * 1 「大震災 100 の検証」
兵庫県震災復興研究センター：編
防災から危機管理、復興のあり方から
市民生活まで総合的に明らかにして検証する。
- * 2 学校防災「神戸からの提言」
全教神戸市教職員組合編
神戸新聞総合出版センター：発行
学校が長期の避難所になって見えた
大切な「防災教育とは?」

- * 震災の教訓は生かされているか? (学校現場での検証)
- その①「安全」校舎の耐震性 その②「安心」心のケア
- * 被災地と結ぶ
- その① 有珠山の被災地 その② イラン大地震
- * 「義捐金」のお願いと、ありがとうコーナー

・その①「安全」の条件 校舎の耐震性

右の表は、神戸市内の学校の被災状況を、全体の中でどれだけだったかがわかるものです。

ほとんどの学校が被災しており改めて、地震の発生が3時間後だったらどんなに被害が大きかったか、想像するだけでも恐ろしいことです。

このような結果を受けて、校舎の耐震性が問われた学校も少なくありません。その後の復興過程でその教訓は生かされているのでしょうか?

2003年8月の新聞紙上で文科省による「公立小・中学校の耐震診断実施率」が発表されました。それによると、「全国の公立小中学校の校舎や体育館13万1482棟のうち耐震性に問題がないことがはっきりしているのは、半数以下の46,6%に過ぎない」という調査結果です。

学校施設は、災害時に避難所になることが多く、そのため設計基準の改定が行われました。1982年以降は、耐震性が強くなったのですが、問題はそれ以前の校舎の耐震診断の結果です。調査結果では、診断済みの割合は、35%に過ぎないとなっています。

平成6年度の神戸市立学校園数及び被災校園数

校種	校園数	被災校園数	比率 (%)
小学校	173	161	93, 1
中学校	82	78	95, 1
高校	12	12	100, 0
幼稚園	71	37	52, 1
盲・養護	6	6	100, 0
高専	1	1	100, 0
合計	345	295	85, 5

さらに兵庫県に限ってみると、耐震化率は43,1%、耐震診断実施率は32,9%で、全国平均を下回った結果になっています。その上神戸市に到っては、学校施設808棟のうち、2002年度末までにその診断を実施したのは67棟で、実施率は8,3%、補強も23棟に留まるという結果です。

耐震診断や耐震化が進まないのも、財政難の中で、校舎の再建や改修を優先させた結果ということです。「今後3年で残りを調査する」としていますが、財政的な問題から、「その実現は不透明」と書かれています。補強には億単位の財源が必要、コンクリート抜き取りには数百万円かかるということです。震災の教訓が生かされないで、年月が経っただけで復興が進んでいるとされるのは、大きな不安を今後残すことになり、早急に改善を求めたいものです。



・その②「安心」の条件…すべての子ども達への「心のケア」

震災の教訓は、学校現場が安心と安全な条件を普段から備える事でした。被災直後、全国バラバラに散らばった子ども達が帰ってくることを考え、教職員数が据え置かれ、心のケアのための復興担当教員が置かれました。

復興担当教員は、学校の復興、防災関係の資料づくりなど様々な取り組みを行いながら、ケアの必要な児童、生徒に個別に関ってきました。その結果、ケアの必要な児童生徒数は年々減ってきています。問題は、それと呼応するように復興担当教員を減らされてきていることです。

(※資料1)

9年目を迎えようとする被災地神戸では、震災復興は、自助努力を求められたため、様々な援助を受けた多くの家庭は、今、経済不況の中でその返済の目途が立たず、一時減少傾向にあった就学援助を受ける児童がまた増加傾向にあります。

養育義務が果たせない家庭が増加し、様々な問題を抱えた途中転入が増え、その対応に追われる日々です。被災地だけでなく、復興住宅を校区に持つ学校など、震災の影響は全市的なものになっています。

このような震災の二次的な問題を抱えた親、家庭を含めたきめ細かな心のケアが、新たな課題として見えてきています。

被災地神戸の今なお深刻な実態を踏まえ、県や国に復興担当教員の配置を継続する意見書の提出を求め、議会も全会一致で採択を行いました。

しかし、本当の安心の条件は、「心のケアが必要な数字に表れた児童だけではなく、表れない児童も含めたすべての子ども達を視野に入れたケアこそ日常的に必要なものである」という事ではないでしょうか。

そのことは、「子ども達が主人公となる学校であり、そこで人間として大切にされ、豊かな人間関係が作られること」なのです。震災の教訓は、

【このような学校が、結果として災害としての非常事態でも、子ども達は一層すばらしい力を発揮する(学校現場からの提言)】としています。学級担任が、少人数で一人一人と丁寧に関わる条件として【30人以下学級】は、【安心】を保障する第一歩の取り組みです。

今後、被災地への加配としての復興担当教員から、すべての学校への少人数学級実現への転換が求められます。



(※資料1)

教育復興担当教員 配置数の推移

	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度
神戸市									
小学校	63	88	80	88	92	92	84	55	18
中学校	14	30	45	51	47	47	44	38	28
計	77	118	125	139	139	139	128	93	46

北海道 有珠山噴火被災地 洞爺湖温泉小学校の復興教育から学ぶこと

退職教職員の会 中塚 和代 (2003年8月)

さる8月3、4日に洞爺湖温泉町で開かれた北海道民間教育合同研究集会に参加し、災害被災地の復興と防災教育のあり方について交流してきました。北海道の取り組みをお伝えします。

1・町の復興のこれまでとこれから

噴火から3年半が過ぎ、当時の火砕流はほぼすべて取り除かれ、観光客も戻ってきていました。(H・14:88%)

ホテルや旅館も修理され、湖畔もきれいに整備されていました。噴火の直撃を受けたお菓子工場も別に移して営業していました。けれどもよく見ると、くぎ付けの別荘や旅館もいつか目に止まり、建て直しはいずれも大変だと思いました。

町では、様々な見舞金を出し、生活再建支援をしっかりとやられていました。持ち家全壊に500万円、借家半壊でも40万円をH14年に出しています。

被災した道路の修理や付け替えもかなり進んでいました。住民のほとんどが温泉関連の仕事に従事していたので、被災後の2年間は、収入の目途が立たず、父母の苦しみ不安は相当に大きく、子ども達へもいろいろな影響を与えていったことと思われます。

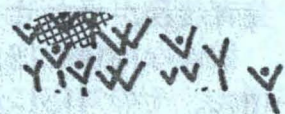
2・町の防災の姿勢

有珠山は25年～30年ぐらいの周期できちんと噴火を繰り返す、いわば「やさしい火山」だということで、もう次の噴火を見据えて日々の暮らしや学びを大切にしていることがうかがえました。

町役場支所のそばの火山科学館では、日常的に子どもだけではなく大人も皆、地球のメカニズムについて学び、構えを作ることができます。打ちひしがれてばかりいないで、噴火を町の産業に取り込み、おさまった火口を学びの散策路にしたり、観光の資源にしたりしていました。



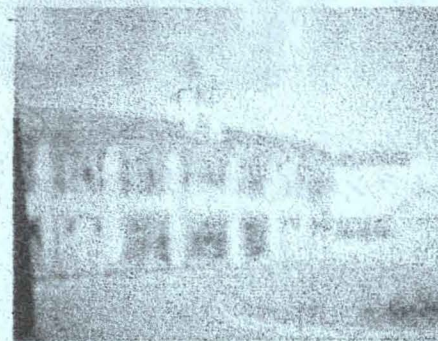
有珠山に続く道路



そのためには科学の研究の成果を正しく受け止め、情報を得て公開していました。2000年噴火では、一人の犠牲者も出すことなく避難指示を徹底して、町民と観光客を守りました。

3・子ども達の教育では何が配慮されたか

校舎に大量の熱泥流が入り込み、使えなくなった洞爺湖温泉小学校は父母の避難先の広がりのため、5箇所にも別れ別れになって学校が再開されました。避難先の学校の先生の協力も得ながらそれぞれのところで分校として教育活動を続けて、子ども達の不安を少しでも減らそうとされました。同時に災害時の異常な子どもの変化を父母に「あたり前」のこととして、情報をきちんと伝え、父母と共に乗り越えようとしたのです。災害時の父母の動揺、周囲の景色、道路の破壊、友だちの転居など、すべての非常時の中で、「学校というところは唯一、日常を取り戻せる場所」と位置付け、子ども達を受け止めようとしたことがうかがえます。そして父母の不安や子どもの変化を地域専門家と協力したり、専門家とつないであげたりして、解決していこうとされました。



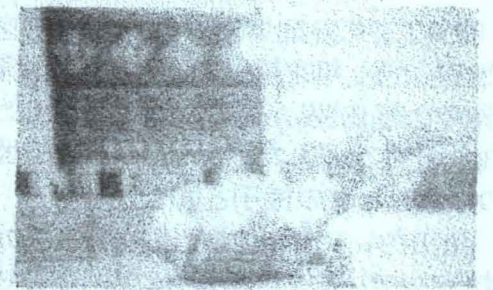
建替えられた洞爺湖温泉小学校

はじめ地域からも、いろいろ不満が学校へ持ち込まれましたが、学校長が保護者の相談や悩みを受止め、納得いくまでしゃべることができた父母は、少しずつ学校の先生の動きを認め、頼りにするようになりました。父母は今では「学校へ用があってやってきた時、何となく帰りたくない“居心地のよい所だ”と言っています。

学校は、噴火の心配のない所に新築され、子ども達は木の香りいっぱいの校舎で学んでいます。できるだけ塗料も塗らずに木の持ち味を生かし、壁も減らして、木づくりの校舎でした。でもまだ元の人数には届かず、児童数は100人ということです。

先生方は、小規模の学校だから保護者一人一人と連絡をとり、転居していった先まで家庭訪問し、子ども達を励ますことができたと言っていました。

虻田町立火山科学館



被災地イランに思いを寄せて

昨年12月26日早朝、イラン南東部を襲ったイラン大地震は、想像を絶する被害をもたらした。丁度地震が起こる前、23日にイランに旅立った湊中学校の長田さんが、被災地とは離れたテヘランにいたとはいえ、緊迫した様子を知らせてくれました。崩れたがれきに埋まった状況、寒さとの戦い、9年前の神戸の崩壊した町の様子と重なります。

長田さんの情報、また被災地NGOが現地に行った様子を、この紙面でお伝えすることで、被災地イランに思いを寄せて、ぜひ、今何ができるかお互いに考え行動を起こしたいものです。

イランでの出来事 長田寿和子

この冬休み、イランに偶然行くことになりました。

昨年7月、淡路島夢舞台で行われたアイアーン国際会議で出会ったイランの先生マリアムさんと大変仲良くなり是非来てくれと招待を受けたからです。

彼女の家はテヘランにあり12月26日は豪華なイランの宮殿を見物した後、彼女の家に戻ると、彼女のお母さんが「きょうは大変な地震がバムであったのよ。」といったのでテレビを見ると素晴らしい世界遺産級のバムの城砦が粉々になっています。死者数も次々増えていきます。



これは大変な地震だとマリアムさんのメールを見ると、すでに日本から私たちのML「ねがいコネクション」へ次々イラン地震へのお見舞いのメールが届いています。

テヘランは揺れもしなかったのですが、次の日からはバムから飛行機を経て救急車で続々テヘランの病院へけが人が搬送されていくということで救急車のサイレンの音が絶えませんでした。



町の至る所に救援物資の山ができ、壁には「孤児になった子の里親募集」の張り紙や「家へホームステイさせてくれる家庭の募集」の張り紙が増えているとファルシ語の読めないわたしに友達は説明してくれました。

テレビは地震情報ばかりを流し、家族は暗いムードになっていく中、それでもわたしを手厚くもてなしてくれました。学校でも手作りのごちそうを用意して子どもたちは大歓迎してくれました。

同じこのような子どものたちの可愛さ、すばらしさ、賢さを目のあたりにして改めて犠牲になったバムの子どもたちの無念さを思います。



神戸のNGOがイランを訪問

神戸の震災の教訓を生かすために

CODE理事村井雅清、CODEスタッフ斉藤容子 両氏、現地へ

阪神・淡路大震災の教訓を復興に役立ててもらおうと、一日に神戸をたち、五日、バム市に入った。

市内は一面、がれきの山と化していた。市民らは自宅のあった場所の前にテントを張り、赤新月社から配られた毛布やパンで急場をしのいでおり、町を歩くと「毛布が足りない」「家族が死んでしまった」と訴える人々に囲まれたという。

村の被害状況は人口一万六千人のうち三千人死亡、七十%以上の家が全壊し、三十%が使用不可能の状態である。

学校も町全体で五十校あったらしいが、ほとんどが破壊された。いくつかの学校を見てみたが、半壊、全壊などひどい被害を受けている。校庭に被災者がテントを張っていた。

保健省から、バム市内、バム周辺地区のヘルスハウスが九十六箇所中九五箇所倒壊した。その再建を各国にお願いしたいとのアピールが会議でされた。ヘルスハウスとは、予防接種や、簡単な薬剤配布などのプライマリヘルスケアをするコミュニティの中にある診療所を指す。再建費用は一つに四万ドルかかる。鶴飼先生としては、これを1つでも2つでも日本の支援で建てられないかと考える。CODEも協力することにした。

同国の住宅は、ほとんどが日干しれんがと土で造った「アドベ住宅」。村井さんは、基礎をきちんと作り、つなぎにセメントを使えば耐震性は大きく向上するといいい、「復旧を急いで同じ住宅を作れば悲劇を繰り返す。国の復興計画が固まる前に、現地でもできる技術を伝えたい」とした。

首都テヘランでは、イラン自然災害研究所を訪問。壊れない家の再建や職の確保など十項目を盛り込んだ「KOB Eからの提言」を手渡した。村井さんは「中長期的な視点で、災害に強い町づくりができるよう支援を続けていきたい」と話している。

支援活動へのカンパは

郵便為替「00930・0・330579」の「CODE」へ。

通信欄に「イラン支援」と明記。

緊急報告の一部（一部、1月9日神戸新聞含む）

